

日本社会福祉学会関西地域ブロック・関西社会福祉学会  
「第38回 若手研究者・院生情報交換会」開催報告

2016年10月2日(日)14時～17時、大阪府立大学中百舌鳥キャンパス学术交流会館において、日本社会福祉学会関西地域ブロック・関西社会福祉学会による「第38回 若手研究者・院生情報交換会」が開催されました。講師に同志社大学商学部教授の佐藤郁哉先生をお招きし、前半は佐藤先生による講演「定性的(質的)研究とは?—エスノグラフィーの場合—」、後半は大阪府立大学教育福祉学類の西田芳正先生と田垣正晋先生を交えて指定討論を行いました。雨天にもかかわらず、98名の参加者が大阪、京都、兵庫のほか東京、神奈川、福井、高知、九州などの大学から集まりました。

佐藤郁哉先生は、シカゴ大学で学ばれ、『暴走族のエスノグラフィー』(1984年、新曜社)、『現代演劇のフィールドワーク』(1999年、東京大学出版会)などの研究報告を著されたことで知られます。定性的な研究の魅力と方法がわかりやすく書かれた『フィールドワークの技法』(2002年、新曜社)、『質的データ分析法—原理・方法・実践—』(2008年、新曜社)、近著『社会調査の考え方 上・下』(2015年、東京大学出版会)などは、多くの研究者や大学院生の手元に置かれ、手引きとなってきたことと思います。東京で教鞭をとられていた佐藤先生が同志社大学に来られた今年、この会にお招きできたことは大変幸いでした。

講演は、質的(定性的)調査/エスノグラフィーについての「起源」、ご自身の体験も交えながらの「エッセンス」、質の良い研究のための「質的データ分析とQDAソフトの活用」から成るものでした。その中で佐藤先生が繰り返し説かれたのは、かつていわれた「量的研究か、質的研究か」ではなく、「質の良い量的・質的研究か、質の悪い量的・質的研究か」が問題なのだということでした。量的研究と質的研究のそれぞれについて良質な例と「残念な」例やタイプを具体的に示され、「数値に血を通わせる・物語に規律を与える」方向を目指すことを提案されました。

続いての指定討論では、西田芳正先生が生活史インタビューを続けてこられたご経験から、インタビューに頼り、観察が弱いことの問題を指摘されました。田垣正晋先生からは、中途障害者のナラティブ研究をされている立場から、言葉が話せない人への調査をしないことへの批判、歴史研究や市町村レベルの政策研究との親和性、記述言語や文体を再検討する必要性、エビデンスを再考する必要性などが提起されました。これらに対して佐藤先生は、もともとエスノグラフィーでは文字のない民族への調査をしていたことに触れ、言葉がない人への調査がないことについては同感であり、私たちは言葉に頼りすぎていると応答されました。また、名ばかりのエビデンスへの批判を述べられました。

質疑応答の時間に入ると、会場から「QDAソフトをどの段階で用いるか」、「アウトサイダーの目を持ち続けるためにはどうすればよいか」などの質問があがり、佐藤先生からはQDAソフトはデータが多くない段階で分類に使うとよいこと、日記をこまめにつけるとよいこと、手書きの日記の大切さなどのアドバイスがありました。

フロア間でも活発に議論が続けられ、最後は「意識化されない言動を研究者が捉えることを研究倫理でどう扱うか」などに及びました。全体を通して、佐藤先生からは、学問的な誠実さとはどのようなものかをお示しいただき、研究の最も基本的で大切なところを学ばせていただきました。さらに指定討論の先生方が入られたことで視野が広がり、学びが深まりました。

終了後の懇親会には 同志社大学の小山隆先生もお残りくださり、今回のホストをつとめた大阪府立大学の山野則子先生とともに、10 数名の若手研究者・大学院生が和やかに交流を深めました。登壇くださいました先生方、学会のご関係のみなさま、当日の運営や準備を手伝ってくださった大阪府立大学のご関係者に深く御礼を申し上げます。

大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科  
博士後期課程 横井葉子 (当日参加者)

